FRIENDS 2

part.1

For adult only

mechi

Contents

sanctuary 3

僕のオオカミ 64

未成年 107

このたびは、当同人誌を
お手にとっていただき、誠にありがとうございました。
お手に取って読みたいと思っていただき、ありがたく思います。

この本は、2022 年に発行した同人誌を受注頒布用に整えたものです。
お楽しみいただけましたら幸いです。

sanctuary

この夏の休暇を利用して、僕はイングランドのヨークシャー西部、フランボローの海辺に滞在していた。
借りているのは小さな2階建てのコテージで、最寄りの町から車で20分ほどのまばらな林の中にある。東へ5分も歩けば白亜の断崖から北海が臨め、脇の小径(こみち)を下りれば、緩やかに削れた崖の底にある小さな入り江で水遊びができる。
子供が1人か2人いる家族にならぴったりのロケーションで、何もかも失った僕は一人、バカンスというより隠居のような静かな時間を過ごしていた。

人生にはよい時も悪い時もあって、死に際に振り返ればそれぞれ半々くらいの割合かもしれない。けれど、ここ2年の不運と呼べる数々は、平々凡々に生きてきた僕を打ちのめすのに十分な密度で起きた。
愛する者が亡くなり、信じていた者は去り、悲しみは癒えず、どこにも希望は見いだせなかった。友人達の慰めは日を追うごとに空虚になり、聞くに耐えきれず背を向けて、もう半年近く経っていた。
仕事に行き、誰もいない家に帰るだけの毎日。絶望に膝をついても、自ら命を絶てる勇気もない。こんな虚無に未練がましくしがみつく自分が腹立たしくて、そんな日常から逃げ出したくて、衝動的に長い休暇を取った。

場所を移したところで、空っぽな生活は空っぽのままだし、頼れる誰かなどもっといない。それでも、煩わしい喧騒から切り離されたここには、僅かながらの平穏があった。
最初の数日は、食糧や飲料を山程買い込んでコテージで怠惰に過ごした。好きな時に寝て、起きて、好きなものを好きなだけ食べて、読書をし、適当なＴＶを無音でつけておきながら飲んで、寝落ちて、ベッドで寝直した。
食糧品が尽きてやむを得ず町に出ると、思いがけないささやかな驚きがあった。